



図51 真景図と調査区の対照

西小池の底よりもかなり低く、明らかに池からの排水を意図したものといえる。これを真景図にみられる両池をつなぐ水路として考えるには無理がありそうだ。埋戻し後の溝底の高さは西小池の底に近く、西小池の拡張にあわせて改修された結果が真景図の状況であろう。

真景図を検討すると、池の水は西小池の北西から流れ出し、大乗院西側を流れる尾花谷川へと排水されている。しかし、西小池拡張以前の排水路は未確認であった。今回の調査により、SD7630が当初東大池の排水路であった可能性が指摘できる。

その後、西小池の南西方向への拡張と中心建物群の北西への移動といった大幅な刷新によって排水路が当初の機能を喪失し、一部が庭園を構成する要素として庭園に取り込まれたと考えたい。

5.まとめ

大乗院の中心部分は多くの研究業績が蓄積されてきたが、発掘調査による所見を新たに検討材料として加えることができたことは大きな成果であった。今後、この成果を庭園研究や大乗院庭園の整備に大いに活用を図っていく必要がある。近代以降、大乗院庭園の近景部分は大きく改変されており、その実態は発掘調査によって明らかにしていく必要がある。東大池西側の調査は継続しておこなわれる予定であり、更なる研究の進展が期待できるものと思われる。

(金田)

平城専らむ欄①

◆平城宮造営尺長について

奈良時代の尺度に関しては、大宝令大尺、小尺の理解をめぐっての議論があるが、それはさておくことにして、その尺度の実長について整理しておきたい。宮本長二郎氏によれば、平城宮朱雀門等の宮城諸門、大垣の造営尺は0.2945m～0.2958mであり、「第一次内裏(推定)」における奈良末期の遺構の造営尺は0.2990m～0.3021mの現尺に近い値を得て、全般的には8世紀初期の9寸7分台から、8世紀末期の9寸9分台まで年代を追って尺が伸びる傾向にあるという。

私は、かつて、平城京条坊について検討した際に、宮西面大垣の壬生門と佐伯門の南北心々間距離から得た1尺=0.2961mを基準尺長として念頭においた。その後、格段に進歩した平城宮の調査成果の中から、造営計画の基本的な骨格となるような大区画施設の遺構を対象にして尺長を算出すると、朱雀門～第一次大極殿院南門：0.2962m。壬生門～第二次大極殿院南門：0.2963m。内裏区画第Ⅰ期の南北長：0.2953m。同東西長：0.2952m。第二次大極殿院の下層における(下層)朝堂院区画の東西長：0.2950m。第二次大極

殿院の下層南北長：0.2959mとなる。

こうしてみると、平城宮造営当初での1尺は、0.2950mから0.2963mの間にあることがわかる。8世紀の中で尺長が長くなるという通説に対しては別に検証の機会をもちたいが、たとえば第二次大極殿院の第Ⅱ期(740年代後半)での区画東西長からは0.2957m。平城遷都直後の造営である内裏Ⅲ期の区画南北長からは0.2952m、同東西長0.2947mという尺長が得られる。これらのデータによる限り、8世紀中頃にあっては、尺長はむしろ短い傾向を示しているといえる。

(井上和人)